漢詩鑑賞　令和七年七月　　　　　　　　　　　　　　玉井幸久

　壬申七月湘江舟中吟

　　　　　　　　　　　の

雨餘湘峽翠嵐多 の　し

好是扁舟載酒過　　しれにをせぐるに

客與江山皆舊識　　とと

愛聽笑語和鶯歌　　しくのにするを

【通釈】

　起句　雨上がりの相模川の峡谷には青いかすみがたちこめて、

　承句　小舟に酒を載せて舟遊びをするには絶好の風景だ。

　転句　舟上の客も川も山も皆古なじみばかり、

　結句　みんなの笑い声が鴬の歌声と響きあうのを聴きながら行くこの楽しみ。

【語釈】

　壬申…みずのえさる。昭和七年（一九三二）

　湘江…ここでは相模川をいう。洞庭湖に注ぐ大河の湘江に擬す。

　雨餘…雨降りのあと。雨あがり。

　翠嵐…山にかかる青いかすみ。みどり色の山気。

　扁舟…小舟。

　載酒…酒をもって行く。

　舊識…もとからの知り合い。ふるなじみ。

【押韻】

　平声　歌韻。多、過、歌、

【解説】

　簡野道明（一八六五―一九三八）は明治、大正、昭和の漢学者。愛媛県出身。

　宇和島藩の支藩である吉田藩の武士の家系。東京高等師範學校を卒業後、東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）教授となった。編著に「字源」「唐詩選詳説」等がある。

　この詩は作者六十八歳の作。著作活動に忙しい中のひと時を旧知と相模川の峡谷

　に舟遊びを楽しんだ様子を詠んだもの。転句から判断すると作者達はこの地に

　幾度か遊んだことがある様子。又作者には他に「庚午八月避暑金澤」と題する詩

　もあり、神奈川県に関する詩も多く残されている。いずれの詩も文人の詩らしく

　清らかな響きを持つた美しい詩となっています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上